

## p178 「一問一答」

1. ステロイド外用剤は末梢組織の免疫機能を向上させ、効果を発揮する。
2. インドメタシンやフェルビナク等を含む外用剤は、喘息を起こしたことがある人は使用しないこととされている。
3. ケトプロフェンを含む外用剤では光線過敏症が起こるおそれがあるため、戸外活動を避け、患部を衣服やサポーター等で覆う必要がある。
4. 外皮用薬で用いられるステロイド性抗炎症成分は、体の一部分に生じた湿疹、皮膚炎、かぶれ、あせも、虫さされ等の一時的な皮膚症状の緩和を目的とするものであり、広範囲に生じた皮膚症状や、慢性の湿疹・皮膚炎、アトピー性皮膚炎を対象とするものではない。
5. オキシコナゾールやネチコナゾール等のイミダゾール系抗白癬菌成分は、皮膚糸状菌の細胞膜を構成する成分の産生を妨げ、細胞膜の透過性を変化させることで、その増殖を抑える。
6. ピロールニトリンは、患部を酸性に保ち、菌の増殖を抑える。
7. シクロピロクスオラミンは、皮膚糸状菌の細胞膜に作用して、その増殖・生存に必要な物質の輸送機能を妨げ、その増殖を抑える。
8. イオウは、角質層をつくっているケラチンを変質させる。
9. アクリノールは、結核菌、真菌、ウイルスに対して殺菌消毒作用を示す。
10. ステロイド性抗炎症成分のうちコルチゾンに換算して1g（又は1mL）中0.025mgを超えて含有するものは、特に長期連用を避ける。
11. 非ステロイド性抗炎症成分であるウフェナマートは、湿疹、皮膚炎、かぶれ、あせも等による皮膚症状の緩和を目的として用いられる。
12. 皮膚に温感刺激を与え、末梢血管を収縮させて患部の血行を促す効果を期待して、カプサイシンが配合されている場合がある。
13. 一般的に、じゅくじゅくと湿潤している患部には、有効成分の浸透性が高い液剤が適している。

【解答】

1. × ステロイド外用剤は末梢組織の免疫機能を低下させるため、皮膚感染が起こりやすくなる。
2. ○
3. ○ 光線過敏症の副作用が問題となるのは、特にケトプロフェンに多いが、ピロキシカムでも注意。
4. ○
5. ○
6. × ピロールニトリンは菌の呼吸や代謝を妨げることにより、菌の増殖を抑える。患部を酸性に保ち、菌の増殖を抑えるのはウンデシレン酸。
7. ○
8. ○
9. × アクリノールは結核菌、真菌、ウイルスには無効である。
10. ○
11. ○
12. × カプサイシンは、末梢血管を拡張させて患部の血行を促す。
13. × じゅくじゅくと湿潤している患部に適しているのは、軟膏。液剤は皮膚が厚く、角質化している部分に適す。